はしがき

本書の目的は書名の通り、選択体系機能文法（機能文法）の枠組みによって日本語モダリティを分析することです。機能文法は、1960 年代から MAK ハリデー教授を中心として築き上げられた体系です。その特徴は例えば、観念構成・対人的・テクスト形成という三つの「メタ機能」によって、言語の意味や機能を重層的に分析する点にあります。「言語が数多くの選択によって成り立っている」という考え方を視覚的に表しているのが「選択体系網」と呼ばれる図表です。本書では、このような枠組みを用いて日本語モダリティを分析していきます。またこの枠組みは、テクスト分析を行うには非常に体系的な構造を有していると言えます。本書では、第 6 章においてテクスト分析の実例を示します。

機能文法におけるモダリティは「肯否極性の中間領域に位置する」というように定義されます。これは Fillmore（1968）に端を発すると考えられる「文を命題と話者の主観に分けた場合の、命題を除いた部分がモダリティである」という定義とは異なり、「主観」を廃した定義であるように思われます。日本語学においても 1980 年代以降にモダリティ研究が盛んになりましたが、多くは「文から命題を除いた部分がモダリティ」という考え方を踏襲してきたように思われます。この定義は、叙法構造として論ずべき、例えば時制や否定などもモダリティ体系に取り込んでしまうという短所に繋がったような印象もあります。本書では上述のような機能文法としての定義により、客観的に日本語モダリティ体系を捉えられたのではないかと考えています。また、機能文法によるモダリティ分析の特徴として、モダライゼイションとモデュレイションという下位分類も特有のものであると考えらます。

本書は五人の研究者が集まり、二年間の共同研究を経て成果として纏めたものです。第 1 章はモダリティ研究の概括と本書全体の見通し、第 2 章は国語学・日本語学におけるモダリティ研究史と位置付けています。第 3 章では機能文法全体を簡単に紹介しています。この枠組みを用いたモダリティ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

の下位分類を第 4 章で扱い、続く第 5 章ではコーパスを利用してこれら下位分類について検証します。実質的な最終章である第 6 章は、応用編としてモダリティ分析を適用したテクスト分析の実例を示します。章立てについては、各担当者が専門としている領域に近いよう、なおかつ可能な限りで文体などを統一して、全体としての一体感を達成するようにと企画しました。しかしながら編者の力量不足で、各章には註の付け方や節立ての区分など担当者の個性がかなり強く残っているように思います。機能文法によるモダリティ定義そのもの、分析の方法論、下位分類についてなど、読者諸氏からのご教示をお願い致します。

本書は龍谷大学国際社会文化研究所 2012・2013 年度共同研究「機能文法による日本語モダリティ研究」の成果として、同研究所叢書として刊行されたものです。本書の編集については、くろしお出版の池上達昭編集長にお世話になりました。ここに著者一同、心よりお礼を申し上げます。

丙申　長月

編者　記す

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

第 1 章　機能文法によるモダリティ分析にむけて 1
1. はじめに 1
2. 機能文法によるモダリティ分析にむけて 2
3. 対人機能的意味づくりにおけるモダリティの所在 11
4. 対人機能的意味資源における日本語モダリティの概念化にむけて 25
5. おわりに 64

第 2 章　陳述論の系譜とモダリティ 67
1. はじめに 67
2. 山田孝雄の「統覚作用」 67
3. 時枝誠記の「陳述」 68
4. 金田一春彦の反論 70
5. 渡辺実の叙述と統叙 72
6. 北原保雄の承接順序 77
7. 南不二男の「文の階層的分析」 80
8. 言表事態めあてのモダリティ：仁田義雄 89
9. 意味的階層：益岡隆志 92
10. 非現実を表す形式としての叙法論 1：尾上圭介 95
11. 非現実を表す形式としての叙法論 2：野村剛史 98
12. 非現実を表す形式としての叙法論 3：Heiko Narrog 100
13. 非現実の表現と話者の態度の叙法論：森山卓郎 102
14. 「叙法性」としてのモダリティ：工藤浩 106
15. おわりに 109

第 3 章　機能文法での叙法体系・モダリティの定義 113
1. はじめに 113

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

2. 選択体系機能言語学について 114
3. 選択体系機能理論におけるムード 133
4. 選択体系機能理論におけるモダリティ 143
5. 選択体系機能理論に基づく日本語のムードとモダリティ 163
6. おわりに 170

第 4 章　機能文法による記述体系 173
1. はじめに 173
2. 選択体系網 175
3. 日本語叙法構造について 179
4. 証拠性の扱いについて 180
5. 証拠性以外の検索例 187
6. おわりに 202

第 5 章　モダライゼイションとモデュレイションの下位分類 205
1. はじめに 205
2. 品詞分析 206
3. 助動詞の分類 216
4. モダライゼイションとモデュレイション下位範疇の意味的関係 219
5. おわりに 226

第 6 章　テクスト分析の中で対人的言語資源を考える 229
1. はじめに 229
2. テクストを概観する 229
3. テクスト選定 231
4. テクスト分析 235
5. 再びジャンル 285
6. おわりに 286

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章　結び 295

参考文献 306
索　引 318

日本語叙法構造の選択体系網 325

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第1章

機能文法による モダリティ分析にむけて

1. はじめに

本章では、日英語を対象としたモダリティ[1]の先行研究をもとに、その概念化をめぐる問題にも言及しながら、本書が適用する機能的接近法の理論的指標と骨子を提示する。

2節では、まず、本書の記述的枠組となる機能的接近法について検証する。モダリティをどのように分類し、言語使用のどのような点を明らかにするかは、機能的接近法も含めた他の接近法（認知的また構造主義的接近法など）においてもその射程と分類方法が異なるため、機能的接近法[2]の所在についても客観的に整理し、本書の基盤とする理論的枠組の特徴と有効性についてまとめる。

3節では、モダリティ概念の所在と定義について検証する。3.1では、Palmer（1986, 2001）を中心とした類型論的な先行研究をもとに、モダリティ概念の射程について整理する。次に、3.2では、先行研究における日本語モダリティの所在について確認し、本書の支持するモダリティ領域について考察する。

1　モダリティという用語は、研究者により多様な意味範疇を指す。本書は、狭義的な立場をとる。また、先行研究で広義に捉えられてきたモダリティの意味範疇を「対人機能的意味資源」の中で総体的に捉えなおし、テクスト分析のための機能的接近法の中で再構築を試みる。したがって、本章で使用されているモダリティという用語は、特別な注がない場合は、先行研究で多様に捉えられてきたモダリティの意味領域の総体を指す。

2　機能的接近法にも種々のアプローチが存在するためその射程と理論の目的について整理する必要がある。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

最後に、4 節では、モダリティ分析のための作業モデルとなる選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics, 以下、SFL）について、理論の目的と射程、分析方法の特徴を説明する。

後続する章では、陳述論を中心とした日本語モダリティ論（第 2 章）の考察、本枠組みの詳細説明（第 3 章）、モダリティの概念体系と整理（第 4 章）、コーパスデータを利用したモダリティの下位区分と表現様式の検証分析（第 5 章）、テクストタイプ別のモダリティ分析（第 6 章）へと展開する。本章の内容は、各章で扱われる内容との関連性において、議論の参考および分析の方向性を確認するものとして参照されたい。

2. 機能文法によるモダリティ分析にむけて

機能主義[3]に基づく言語の分析方法は多岐にわたる。まず、2.1 では、「機能」とはなにか、また「機能的接近法」の多様性について概観し、本書の適用する「機能文法」の所在（理論的立場、言語分析の射程、理論的有用性）について、他の機能的接近法との関係性に言及しながら、明らかにする。さらに 2.2 では、モダリティ分析に先立ち、対人機能的意味資源を包括的に分析するための理論的な指標—包括的で体系的な分析モデルに必要な指標—を提示する。

2.1　機能主義と機能文法の理論的射程

言語を機能的に記述分析する立場をとる言語学者の多くは、コミュニケーションの手段としての言語の働きについて理論的な体系化を図っている。言

3　機能主義に限らず、いかなる言語理論もその目的と射程を持つ。したがって、各理論的立場は、対象とする言語体系の分析層の設定と記述方法を規定し、ある一貫性を持ちながら言語記述全体にその光を当てることになる。この意味において、機能的接近法の射程の違いにより、たとえば、文法層と意味層の体系化の実態も各立場によって異なるため、本書の「機能文法」の射程についても、どのような理論的射程を持ち、モダリティのどのような側面を明らかにすることができるかという点を明示し、文法理論の適応範囲と言語分析モデルの理論的立場を規定する必要がある。より包括的な言語モデルの分析特徴は、Gonzálvez-García and Butler（2006）を参照のこと。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

陳述論の系譜とモダリティ

1. はじめに

本章の目的は日本語のモダリティを国語学・日本語学の観点から概観することを目標とする。主要な文献を簡単に紹介し、第3章以降の機能文法による分析に対する前提になるものにしたい。モダリティとの関係で、陳述論を縦糸にして述べていくわけだが、まず、20世紀初頭の山田孝雄や時枝誠記の学説に触れた後、金田一と渡辺といった助動詞にかかわる重要な文献を参照し、1970年代の北原や南の業績を要約して、1990年代以降の仁田・益岡らの研究を概観した上で、尾上・野村・ナロックといった、モダリティを現実世界との関係という観点から考えた人たちの学説を見た後、両者の観点を含んだ森山、モダリティをより広く捉えている工藤へと、論を進める[1,2]。

2. 山田孝雄の「統覚作用」

周知のように山田文法においては、文(あるいは句)のことを「句」という。これは単に複数の語が並列して意味を成していればよいのではなく(その場合は連語といい、「遙かに高し」「わが隣に住む」など、複数の観念(実在するものとその属性)の組み合わせではあるが、「完全なる思想」を表していない)、1つの思想として完結していなければならない、という。(1)にあるように、この組み合わせの作用は、人間の思想の根本の要素であると言われる。

1　本章を執筆するにあたり、特にNarrog(2009b)の優れた学説史や2015年8月に神戸で行われた文法学研究会第7回集中講義で重要な知見を得られた。記して感謝したい。

2　「モダリティ」という語を日本語について初めて用いたのは中右(1979)だとされている。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

機能文法での
叙法体系・モダリティの定義

1. はじめに

第1章では、言語類型論的研究および日本語における先行研究の考察がなされ、日本語モダリティ概念の所在について、機能的接近法の枠組みの中で検討された。その結果、モダリティの中心的概念は、基本的には、認識的モダリティと義務的モダリティ（別名、束縛的モダリティあるいは根源的モダリティ）であるものの、対人機能的意味資源を具現する主要な意味体系として捉えるならば、肯否中間領域を具現する狭義的な意味概念として定義できることが示唆された。

第2章ではモダリティに関する日本語学の研究史がさらに広範囲に考察されている。そこでは、命題部分を取り囲む要素をすべてモダリティとする考え方があり、どの文要素が話者の主観を表し、どの要素が客観的な命題内容を表すかという点に焦点をあてた研究についても、いくつか概観した。

本章では、M.A.K. ハリデー（M.A.K. Halliday）によって創始された選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics: 以下 SFL）におけるムード（Mood）とモダリティ（Modality）の概念を検討する。

2節では SFL の理論的枠組を概観する。とりわけ3つのメタ機能（meta-function）についてその内容を紹介し、ムードとモダリティが言語という壮大な有機的構造体のどの辺りに位置しているのかを大まかに展望できるようにする。

3節で、SFL におけるムードの概念を明らかにする。SFL のムードは言語的「交換（exchange）」としての話し手の発話役割（speech role）と基本的

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

発話機能（primary speech function）に立脚していることを見る。

4 節で、SFL におけるモダリティの定義をとりあげ、ムード概念とモダリティ概念の区別と相互関係を論じる。SFL のモダリティ論の中核を占める「肯否中間領域」にかかわる意味構築という考え方について詳述する。

5 節においては、SFL に基づく日本語のムードとモダリティのタイプと分類法を提示する。SFL の枠組みを日本語のムードとモダリティに応用する上で、Teruya（2007）を参照した。Teruya（2007）は SFL に基づく包括的な日本語文法研究として英語で発表された先駆的著作である。第 5 節の内容は多くの点で Teruya（2007）に負うところが大きい。同時に、本書独自の立場から Teruya（2007）とは異なるいくつかの論点を提出している。

6 節では、本章の議論の要点をまとめ、次章における SFL の叙法体系網（MOOD System Network）の提示とモダリティ・システムのより明示的かつ体系的な位置づけへとつなげたい。

2. 選択体系機能言語学について

2.1　言語と層

機能主義的言語学について、山口（1988）は次のように述べている。

> 言語研究における機能主義とは、概略「言語の構造のありようはそれが果たす特定の機能によって決定されている」という言語観である。
>
> （山口 1988: 66）

言語現象に対して機能主義的説明を部分的に取り入れる研究もあれば、大幅に取り入れる研究もある。その度合いは様々である。その中で、SFL は最も徹底した機能主義的言語学であり、独自の体系性を有している。SFL の全体像を概観するには龍城（編）（2006）が簡潔かつ包括的にまとめられているので参照されたい。

SFL で言う機能（function）は意味（meaning）を言語化する上での基盤である。その点で意味機能という用語の使用が適切な場合も多い。すなわち SFL は機能から見た意味の理論である。意味がどのように発生し、どのよ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

機能文法による記述体系

1. はじめに

第1章から第3章で考察したように、日本語モダリティ研究で扱われている対人機能的意味概念には、狭義のものからかなり広範囲にわたる概念を包括するものが存在する。

この概念範疇の差異により、あるモダリティ領域を定めることによりその中に包括されない領域を生み出す結果を生み出すことになるが、それらがどのような意味的な働きを持つかという機能的な意味範疇の概念が不在であったため、モダリティ領域の区分が選択的に行われてきたようである。本書では、言語の意味体系に内在する対人機能的意味領域を集合的な概念として捉え、モダリティを含む対人機能的な意味領域と言語体系の始原的意味体系と定める。また、「従来のモダリティ」に含まれた諸概念を「対人機能的意味範疇」に含まれるものとして捉え、肯否中間領域に属する不確定な意味領域を指す概念としてモダリティを定義した。

このような立場を踏まえ、本章では、本書の理論的な枠組を提示するために、まず、日本語の対人機能的意味資源全体を包括的にまとめるための日本語叙法体系網（The system of MOOD in Japanese）を提示し、その中でモダリティ概念と表現様式の所在を体系的に整理する。この理論的枠組の設定により、対人機能的意味体系の中で種々の先行研究の概念範疇の所在も客観的に確認が可能となり、個々のアプローチ間の違いも対人機能的意味資源の領域として概観するための指標となると考える。

次に、先行研究でとりあげられた種々のモダリティ表現の多様性と機能性

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

モダライゼイションと
モデュレイションの下位分類

1. はじめに

本章では、モダライゼイションとモデュレイションの下位分類について品詞分析を行い、その後に各下位分類の意味的な面について考察する。

前章までで、日本語のモダライゼイションとモデュレイション下位区分が確立した。たとえば必要性の「なければならない」で示されるように、日本語モダリティ表現は非常に複雑な統語構造をしている。本章では、まず伝統的な品詞分析を施すことによって日本語モダリティ表現の統語構造を明らかにする。日本語のモダリティ表現が統語的に複雑であるという仮説を、語数分析によって検証する。

続けて、モダリティ表現に不可欠な助動詞に焦点を当てる。国語学や日本語学の伝統では「法助動詞」という範疇を設けることは一般的ではなかったと考えられるが、助動詞の表す意味や機能に着目するとそのような範疇立ても可能であろう。

本章の後半は、モダライゼイションとモデュレイションの下位分類9つについて意味的な観点から分析を試みる。本章前半で統語構造について品詞で分析するが、叙述形式の前半と後半で肯定－否定という肯否極性の対をなす表現が多数を占めることが明らかになった。「ある」を「ない」というように否定にすることによって、許可性や必要性という意味範疇が変化するか否かを明らかにしていく。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章

テクスト分析の中で対人的言語資源を考える

1. はじめに

従来の日本語モダリティの捉え方で、「モダリティ」として一括りにされてきた言語資源を、SFL の定義に従ってシステムネットワークの中にはめ込んでテクストを捉えたとき、そこにそれぞれの各社会的目的に沿った言語行動の実態が見えてくる。本章では、第 1 章および第 3 章で述べた SFL の定義による日本語モダリティおよび対人的メタ機能に基づく対人的言語資源が、実際のテクスト分析において、どのような情報を提供するのかについて、ジャンル構造構築を視野に概説する。

2. テクストを概観する

テクスト分析に入る前に、テクストというものを概観的（synoptic）に捉える必要がある。SFL は言語活動を社会的コンテクストとのつながりの中で層化されたシステムとして捉える。この場合の社会的コンテクストとは、社会制度、文化、慣習などといった社会を構成するあらゆる構成素を総体化したものを指し、「状況のコンテクスト」と「文化のコンテクスト」の 2 つを設定している。あらゆる対人的相互作用は意味の選択によってなされるが、状況のコンテクストと文化のコンテクストによって、その意味の選択は特定範囲に限定される。図 1 は、Martin（1999: 36）をもとにして作成した社会的コンテクストと言語の関係を示したものである（加藤 2010a）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章

結び

本書における最大の特徴は、書名のとおり選択体系機能文法によって日本語モダリティ体系を分析したことである。本章は本書の結びとして、各章に関連した主要文献の紹介をしながら内容を振り返ることとしたい。

第1章では、モダリティ研究史を概括した。中心としたのはPalmer（1986, 2001）や澤田（2006）などの先行研究である。「モダリティの定義をめぐって」と題された論考（ナロック 2014）は短いながらも、たとえばモダリティ・ムード・陳述という近接範疇についての区別についてもよくまとめられている。また澤田（2006）は英語モダリティ体系の研究から出発して日本語についても考察している論究であるが、モダリティを次のように定義している。

> モダリティとは、事柄（すなわち、状況・世界）に関して、たんにそれがある（もしくは真である）と述べるのではなく、どのようにあるのか、あるいは、あるべきなのかということを表したり、その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。（澤田 2006: 2）

同書は国語学－日本語学の伝統的なモダリティ観から出発しているのではなく、英語を対象とした法助動詞を中心とする分析から着想を得ているように思われるのである。それはたとえばPalmer（2001: 41,（47）（48））のモダリティ類型を次のように総括していることにも示されているであろう。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers